

『夕立がゲリラ降雨に変わっても』

春野 伊吹

1,386 文字

あらすじ

祖母の初盆と一周忌が迫っている。生前の祖母の姿がよみがえる。住まいや生き方、自然環境さえ変わっていく中で、変わらない日本の「キレイ」はどこにあるのか。「キレイ」が発現する様子を、傍観者として、また、自分の中にも見出した一時の姿を表現した一遍。

祖母の初盆と一周忌が迫っている。慌てて「積読」中の本類を片付け、埃をふき取る。お客様方を迎える準備は、いつも慌ただしく不備を残して苦笑いのもとに終わる。フローリングの床にワックスをかける。若干のツンとした香りと、自分の汗のにおい、ムワッとした熱風と容赦のない陽の光。これが、祖母の初盆の風景として頭に記憶されるのだ。そう、今はただ疲労感と焦燥に満ちているだけなのだが、後々思い出すときには、なぜか「懐かしさ」というスパイスが効いて、若い時への憧憬がプラスされる。別の景色となって頭に思い起こされることを、もう経験として知る歳となっている。祖母を思い出す。最後の数年は、過去と幻想の世界の中に生きていた祖母を。

「家に帰りたい。」

が口癖だった。彼女が結婚後住んだ家ではない。細かくこだわって自分仕様に作り上げたご自慢の家ではなく、生まれ育った実家に帰りたいと毎日こぼしていた。

「辛い。苦しい。」

毎日叫んで、目を離すと救急車を呼んでしまっていた。救急車に乗れば、誰かが自分を老衰と認知症のない、若いときの状態にもどしてくれるのではないか。そんな悲鳴にも似た訴えの前に、両親と私は、一抹の哀しみを覚えていた。

そんな我々を一瞬救ってくれたのが、今回のお客様となってくれる祖母の姪っ子とその家族だった。祖母が生まれ育った家を、当時の風情を残しながら守ってきてくれた人たちだ。彼女らは、祖母を家に招いてくれ、昔話をしてくれた。庭の門を一步くぐった途端に、祖母の顔が晴れやかに澄んでいったのを、我々は一生忘れないだろう。祖母の目は、勿論現在の家の姿など見てはいない。だが、穏やかに悪戯っぽい表情を浮かべた彼女の顔は、この数年で思い出せる限りで最も美しい顔をしていた。在りし日の祖母。五感を通し、揺り戻された記憶の中に生きている彼女は、我々の見えない世界の中で一步一步確実に地に足を付け、目の前の「現実」を謳歌していた。

老人ホームへ入所してからの祖母は、その恵まれた手厚いケアにもかかわらず、いつも辛そうな顔をしていた。育った実家以外の場所は、どこでも同じなのだ。我々との会話も、繋がったり繋がらなかったりする、我が家の古い無線LANのように途切れがちになる。そして、意図しなかったWebサイトへと我々を導く。広告や宣伝が多い。つまり、過去の栄光や自慢話がふと口から出てくる。その割に、祖母の顔は輝かない。人間を本当に幸せにするのは、人に誇れるような武勇伝や成功体験ではないかもしれない、という思いが頭をかすめた。

祖母が亡くなってもうすぐ1年。こういう準備期間に限って、突然のゲリラ豪雨に襲われたりするものだ。法事の支度が進まなくなり、ぼんやりと心を落ち着ける時間を持つ。これからも毎日が澁みなく動いていくように。やがて陽は出る。少々執拗に、無駄ともいえる程のエネルギーを放出しながら。

雨上がりの、ほんのり涼しさが混じる湿った匂い。自身の、小学校時代の夏休みがふと思い出される。あ、私も、今より子ども時代の方が世界は鮮やかにはっきりと感じられ

ていたんだ。気が付くと涙が滴っていた。自分の中に眠る綺麗な風景。ふと、その時の景色が思い出される五感。キレイを育み、湧きあがらせること。懐かしい、と、哀愁を含む言葉を付けた日本の文化の、何か霞がかかった余韻の中に、暫し浸っていようと思う。